
頭が爆発する薬

笹流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭が爆発する薬

【Nコード】

N5569BA

【作者名】

笹流

【あらすじ】

ある日、博士が謎の薬を発明する。

助手が尋ねると、その薬は「頭が爆発する薬」だった。

「『頭が爆発する薬』を作ってみたんだ」

「今、なんと？」

「『頭が爆発する薬』だよ」

「それは比喩的な意味で、ですか？　つまるところ、ドラッグの類ということですか？」

「さあねえ」

「それともまさか、本当に脳味噌を辺りにぶちまける結果になるということですか？」

「さすがにそれはないな」

ある研究室で博士とその助手がその新しく開発された薬について話していた。

明確な答えが博士から返ってくることはなく、助手が何度どのような尋ね方をしても博士は煙に巻くか余計に謎が深まる返しをするだけだった。

「というわけであとはよろしく」

そのうち博士はたったそれだけ言って助手に「その薬」を手渡して研究室から出て行ってしまった。

残された助手はいえ、

「何がよろしくなんだ……」

案の定、どうしたらいいのかわからなくなっていた。

研究室には彼以外の助手はおらず、またそれ以外の人物も誰一人だっていないかった。

おかげで誰かに相談しようにもできず、助手は孤軍奮闘するしかなかった。

別の研究室に行って誰かに相談にしにくいかも考えはしたが、「薬」を「よろしく」されたためにそれはできなかった。

何故なら「よろしく」とは、「しっかり見張っていてくれ」のこと

かもしれないし、「動かさないでおいでくれ」のこともかもしれないからだ。

おかげで研究室に薬を置きっぱなしにして移動することもできないし、ちよつとでも揺らしたら、と思うと持ったまま移動することもできない。

そつと衝撃を一切与えないように移動するという方法も浮かんだが、もしかしたら「この部屋から決して出さないように」のことも、そんなふうに思えてしまつて、移動の手段は一切を封じられることとなつた。

次は携帯電話による救援を頼むことを思いついた。しかし研究室は圏外……ではなく、だが助手には友達が一人もいない……というわけでもなく。

思つたとおりそもそもこんな事態に自分を陥らせた博士への電話は通じなかつたが、それ以外にも助手には協力者が無数にいる。

誰かにこの事態を解決してもらうのが一番だという結論に至つた助手はさつそく携帯片手にまずは一番の親友である……

「よろしく」とは「部外者に一切薬の存在を知られてはならない」ということではないか？

即座に携帯の電源をOFFにしてポケットにしまいこみ、自分の軽はずみの行動に驚きの息を切らした。同時に冷や汗がどつとあふれ出す。

あと少し気づくのが遅かつたら頼まれたことを失敗していたかもしれない。いや実に危なかつた。本当に。

だが危険を回避できたところでこの事態が解決されたわけではない。行動の一つをまた一つ封じられて、いや自分から封じてしまったのだ。

むしろ事態はさつきより悪くなつたのではないか。

「……待つしかないか」

特にその他の事態解決方法が思いつくわけでもなかつたので、とにかく助手は博士が戻つてくることを待つことにした。

しかし最初からこうなるだろうことはわかっていたことだ。愚直に待っていたとしても博士は決して帰ってくることはないということを。

きつと博士は助手をからかっているのだろう。違うとしても、多分、それ以外の受け止め方はない。

ならば何が何でもこの事態を解決してやろうという意気込みが助手の中から沸いてきた。となればさっそく行動だ。

待ってもなんの意味もないことはここ数日研究室から出られない状態から十二分にわかった。

待つ以外の行動、それも薬に対しての。それはもう、「使う」しかないだろう。

さっそく助手は今まで机の上に置いていた薬を手に取り、使って――

「これは、どう使うんだ……？」

薬といっても種類がある。飲み薬なのか塗り薬なのか、座薬だったり点薬だったり、そもそも人に使うものじゃなかったり。

大体の把握は薬の形状からわかるはず、なのだが今回の薬にいたっては、なんというか、どれにも当てはまりそうな気がして決定を下すことは容易ではなかった。

カプセルの形から、座薬か飲み薬……と思いきやカプセルには「ひねって開ける」と読み取れそうなマークがついており、振ってみれば中には液体が入っているような音が。

液体となれば塗り薬の線もあるだろうし、点薬かもしれないし、害虫退治に使うものかもしれない。

と、助手が一旦ここで冷静になってみると何故自分は「使おう」としているのかということに気づいた。いくらこの部屋から出られないからといっても、

この薬は「頭が爆発する薬」なのだ。なんらかの害があることには間違いない。頭が爆発である。

比喩的であろうと直接的であろうとどっちにしろ使えば助手は「人

間」ではなくなるだろう。生きたままか死んだ状態かの違いだけで、しかし使う以外に方法はない。使わなければこの部屋から出ることはできない。何故なら自分はそういう性分だから。頼まれたことを済ますまでは気がすまないのだ。

そういえば「使う」の中で最も安全であろう手段が「害虫退治に使う」ではあるが、それもいつたいなんの害虫に使えばいいのか、害虫といっても何が害虫で何が害虫でないのか？人によってはクモを害虫と呼ぶ人もいれば益虫と呼ぶ人だっているのだ。じゃあ何を退治すればいいのか。

よくよく考えてみれば人間こそがこの地球における害虫ではないのか？……いやきつとそれはないだろう。地球にとってどうかじゃなくて、まず人間が対象であるということが。

もしやるとしたらこの薬の量では一人でしか殺せず、そのあとに増やしている間に警察に捕まっておしまいだ。この薬の存在価値はその程度のもので終わりになるものなのだろうか？

この薬には未来を創っていける可能性が秘められているに違いない。そんなものを博士は自分に何故託したのだろうか？

託したあとでの自分がとるだろう行動を博士はわかりきっていたとでもいうのか？　じゃあいつ博士は戻ってくるのだ？　ところで本当にこれは使つていいものなのか？

もつと待つべきだったのではないのか？　使う、待つ以外の選択肢があったのではないのか？　もしかしたらこれは幻覚？　既に自分はこの薬を使っていた？　いつ？　どこで？　何を？

——やがて頭の中がこんがらがって、

助手の頭は爆発した。

飛び散った破片を拾い集めながら博士と、もう一人別の博士が話している。

「結構かかりましたな。5日ではまだまだ改善の余地がありそうです。もう少しあれの出力を上げてはよかったのでは？」

「いや、あのサイズでは今のところあれで精一杯なのですよ」

「薬型の超音波発生器。ロボットの頭を徐々に狂わせて、最終的にはショートさせる……」。

世の中に増えすぎたロボットを誰にもバレることないように破壊するには最適の道具なんですがね」

「次はもっと早くしてみせますよ」

博士は「薬」を回収して、また研究室を出た。

（後書き）

大学入学して初めて書いてみました。部活の冊子にも載せてないのとおりあえずここにあげてみようかなと。

星新一が好きすぎて、というか星新一しかほとんど読んでなくてこういうのばっか書いてます。

いちいち伏線説明とかいらねいですよね。読んでくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569ba/>

頭が爆発する薬

2012年1月15日04時54分発行